

令和4年度第3回 尼崎市文化ビジョン会議 議事録(要旨)

日時	10月27日(木) 13:00~15:00
場所	尼崎市総合文化センター 7F 第3会議室
委員	上野委員、大永委員、大橋委員、坂上委員、古川委員、善見委員 ※オンライン参加:原委員 ※欠席:武元委員、福田委員
アドバイザー	尼崎市顧問
事務局	文化・人権担当部長、文化振興課長、文化振興課職員3人
オブザーバー	(公財)尼崎市文化振興財団 常務理事、事務局長

1 開会

(事務局)

(会議運営について)

- ① 傍聴:希望者には傍聴を認める。市のHPで告知する。(本日は0人)
- ② 会議記録:録音に基づき議事録案を作成し、委員確認後に確定する予定。
- ③ 配布資料の確認。(郵送資料確認。市・文化振興財団事業チラシ、ピッコロシアター公演ラインナップ当日配布)

2 尼崎市文化ビジョン(第2次)素案について

(コーディネーター)

先週、大近松祭を拝見した。小学生から年配の方まで、市民の皆さんの熱のこもった踊りなどを見て、尼崎の皆さんはアツいなと感銘を受けた。

では、議事に関して、事務局より説明を。

(事務局)

これまでいただいた意見に基づき文化ビジョン素案が形となったので、ご紹介・ご説明し、本日も皆さんにご意見をいただき、最終版へ向けてより良いものにしていくことが会議の目的である。

(資料説明)

- ・資料1 尼崎市文化ビジョン(第2次)素案の概要
- ・資料2 尼崎市文化ビジョン(第2次)素案 1021版
- ・参考 第2回尼崎市文化ビジョン会議 主な委員発言

(コーディネーター)

前回いただいた皆さんの意見は、素案に可能な限りコンパクトに盛り込まれたような印象を持った。委員それぞれに受け止め方が違うと思うので、特に第3章・第4章を中心に各委員から、ご意見、質問・感想をいただきたい。

(委員)

社会包摂に関して、障害者や外国籍の住民の方のことも文言で入っていてよかった。総合文化センターで障害者の芸術活動につながる支援を行うことも入っており、ピッコロシアターも市内の文化施設として広く連携していきたい。

尼崎市のもつ文化資源・公共財の豊かさに気づき、地元の豊かな素材を地元で楽しむ、言わば「地産地消」の大切さに改めて気づかされた。これからは、こうしたものを地域で楽しみ慈しみ大事にしていくことが求められるように思う。

(コーディネーター)

文化の地産地消、って素敵ですね。地消するには育てないといけない、実りの多いものを作る方策を考えていかないと。

(委員)

私も一寸ソラマメの栽培を30年以上取り組んでいるが、育てるといのは言葉に書いたらできるかというところではない。毎回こういう委員会に参加して思うが、行政の資料で書いたら全部できるというような生易しいものではない。いい種を選び、いい豆ができるように、食べられる豆の状態をイメージしているのが、今の文化ビジョン素案のように思う。

今は多様性、反対に包摂性がどれだけ担保されるか、大変矛盾している状況がある。一つのことを認め活かしていくと化学反応を起こし、より育成に結びついていくことが大変だろうと感じた。

「取組の柱」の順番の説明があったが、P6の表のような、俯瞰的に、順番でなくセットで考えるというのが求められるのではないか。抽象的で具体的な話ができているかもしれないが、一つ一つこれまでの会議の皆さんのご意見がふんだんに取り入れられていると感じた。これを約束として、本市の文化振興行政が実行に移す段階の中でどれだけ頑張れるかが課題になってくる。文化振興財団もリーダーの方々でありよろしくお願ひしたい。

(コーディネーター)

後半に仰ったのは、財団のリーダーシップに期待したい、ということですか。

(委員)

はい。育てる、発表することを市民の力でできるように持っていけるかどうか、行政がやっしまい行政の手柄話になるのでは、果たして自ら学ぶ市民が育っていくのか。市民の文化的な意識・グレードが上がり、地域に愛着を持てる状況になったときに初めて行政の力が発揮されたという評価になると思う。

(委員)

「本市が目指す姿」で、土台作りが一番必要である。市民祭りのように継続的にやっておりみんながわかるものは参加しやすいし覚えやすい。一度だけのイベントは多いがそれを継続的にする

のは難しい。それをできる人とできない人がいるので、できる人を沢山増やしていく土作りが必要なのかなと思う。「若い人の夢とチャレンジを応援する」という中で、若い人が先輩の話を聞けるようなきっかけがあればいいなと思う。参加することはあっても教わることはなく、教わることも必要なのかなと思う。

「応援するまち」というメッセージがとても分かりやすい。

SNS に関しては内容が曖昧。SNS といっても YouTube や Instagram もある。発信方法が明確でなく、どういう風に発信していくのか考えておく必要があるのではないか。最近、観光局がリール(動画)上げるのがとても上手。「お城へ行ってみた」等自分が行った気になれるような動画で再生数も伸びている。尼崎を知らない人が「尼崎ちょっと行ってみたいな」とか、地元の人が「尼崎ってこんなかっこいいんだ」というのが、SNS の 15 秒や 30 秒でわかるのは情報源として大きいと思う。ただ SNS による動画の発信というだけでなく、こういう風な宣伝方法で、と書くともっと目を引くかなと思った。

(委員)

資料を見て、会議で出ていた意見が取り入れられ、資料 1 で見やすくしていただき、わかりやすくしていいなと思った。

前は、文化の会議で、尼崎に住む外国人の方の話が出ると思わなかった。日本語ボランティアの講座の資料を自宅に帰って見たら、中国、韓国・朝鮮の国籍の人数はあまり変わらず、他国の方では、1番がベトナム、次にフィリピン、台湾、ブラジル、ネパールの順に増えている、ということだった。直近5年で尼崎の人口は 31,000 人減っているのに対し外国人は 1,184 人増えている、ということにびっくりしたので、今回改めてお話しした。

(コーディネーター)

多様性のところで外国籍の住民の方は盛り込まれている。時代と共に外国人の暮らしも変わってくるので、尼崎市のダイナミズムになるかもしれない、ここに多様性が入っているのは大事なことである。

(委員)

まず、冊子を見事に作られた。これだけの長文、言葉がつながって出てくるのはすごい。ここまで考えているということがわかった。そして、文化を総合的に捉えましょうということが書いてある。私は興行に対しての文化面が一番的確に考えられるかと思うが、配布チラシにあるティーンズサポートチケット事業等もっと広く知れ渡ったらいいと思う。古澤さんのコンサート、中村獅童さんのものなど、立派な内容である。市民はこのことを知っているのか。

(事務局)

対象となる市内の中高生全員に配っている。ただ、行き渡ってはいるが実際に来ていただいているかというところがまだ十分でないとの課題意識がある。先ほど情報発信のご意見があったが、チラシだけだと公演の魅力が伝わっていないところもあるかと思う。予備知識のある中学生は決

して多くないだろうから、中学生がこれを見て古澤さんは実はすごいんだと魅力を伝えることは、SNSなどの情報発信で考えないといけないかもしれない。いただいた意見は一つヒントになるのかなと感じた。

(委員)

中身としても非常に立派なものが提供されているなど思う。先着 10 名といわずもっと増やせれば。

第4章の歴史・文化の部分で、今、注目すべきはお城かなと思う。そこでいい企画をしていたら、文化面の発信にもつながると思う。

(コーディネーター)

後半は、歴史博物館や尼崎城をうまく活用した企画をもっと考えて、ということですね。

ティーンズサポートチケットのチラシに掲載の公演に、若い人は結構来てくれましたか。

(委員)

毎回、何件か応募をいただく。ピッコロシアターもティーンズサポートチケットに協力させていただいているが、この情報をキャッチしている方が、リピートしているという感じがする。市外の方も応募できるのか？

(事務局)

市外の方も応募できるが、配っているチラシが市外となると限られるので、市外で応募されている方はキャッチされている方と思う。

(委員)

とてもお得なチケットであり、市外でキャッチされた方がリピートされていることはあるかなと感じる。尼崎すごい、と市外の方から認識されていると思う。

(事務局)

ティーンズサポートチケット事業は、文化振興財団とピッコロシアターのご協力により行っており、市負担はチラシの印刷費のみである。

(委員)

先ほど、若い人の夢とチャレンジを応援するところで、先輩の話を聞く機会があってもいいのではないかというご意見があったが、まさにそう思う。応援する、というのは聞こえはいいが、実際若い人たちが自分たちで一から企画を考えて何かしていけるかということ、やはり経験をしたことの蓄積から展開していけることもあり、若い人たちに活躍をしていってもらおうとすると、活躍のベースとなるところを一緒に作り上げていくことが必要かと思う。4章でなくてもいいと思うが、若い人を育成するために何をすべきか、具体性のある記述が必要ではないか。その方が、伝わりやすいと

思う。

SNS の話も出てきたが、これは尼崎だけでなく全国的に課題で、伝わってほしいところにイベントや取組がなかなか伝わらないところがある。全体が俯瞰できるようなポータルサイトを作り、そこで自分が検索していけば、SNS のように自分が興味あるキーワードを最初に入れていく、#でこれを追っかけると情報が見えてくる。これをするとこれだけに偏ってしまうこともあるが、いずれにしてもフライヤーなど紙媒体は隔々まで広がっていくのは難しく、文化の情報をどのようにデジタルでアーカイブしたり、プラットフォームとして提供していくかを考えることは必要である。Web 情報は紙と違いどこでも見ることができ、むしろ尼崎以外の人にも伝えていくことに繋がる。今回の素案にはデジタル化に関する表記はないが、その部分も次の改定時になるかもしれないが、尼崎に住む人たちがよりよくここに関わっていける、そして外にも繋がっていくというようなことできるといいと思った。

(コーディネーター)

先ほどの話にあった土台作りという部分とつながるし、情報発信の問題も含めもう少し文言を工夫する余地があるという印象である。

最後に私からも発言したい。若い人の活躍・チャレンジはいいが、それを引っ張っていく人はどうなのかということで、若い人だけでなく、若い心を持つ人にもチャレンジして欲しい。大近松祭でも80代のボランティアの方の説明を受けたが、とても感動的であった。ヤングアットハートという言葉があり、気持ちを若く持つ人たちが若い人を引っ張る、そうすると中高年でもどんどん文化的な現場に出て活躍してもらえ、またそれを見習って若い人がチャレンジしていくような、世代間の循環ができるともっと素敵だと感じた。若い人だけに限定している印象が少しだったので、中高年でも若い気持ちを持つ人たちも頑張れる尼崎、というイメージをどこかに書き加えられないかと思った。

取組の柱の3つ目「学び・楽しみ・交流する文化・芸術体験を支える」で、「学び・楽しみ・交流する」の主人公というのは市民である。一方で「文化・芸術体験を支える」というのは市民も入るが市や財団の役割でもある。前半は市民が主人公で、後半は市や財団が主人公であると受け取られないか、と気になった。「・」も多く、「交流する、」で一旦文章の繋ぎを検討してはどうか。日本語の問題というより印象の問題である。別の委員よりお褒めの言葉もあったように文章自体は非常にコンパクトによくまとまっている。工夫の余地があれば、というところである。

(事務局)

いろいろご意見をいただきありがとうございます。いただいたご意見の中では事務局でも意見迷いながら書いたところにご意見が出てきたという印象。課題意識は一緒だと感じた。例えば、「若い人の夢・チャレンジを応援する」の「若い人」は、私自身ももう対象じゃないのか、等思う中で、コーディネーターの「若い心を持つ人の夢とチャレンジを応援」という言葉が印象的であった。大近松祭に私も参加したが、80歳を過ぎてなお若々しい心で説明をしてくださる、近松かたりべ会の方の話聞いていて、年齢ではないなと感じた。物理的な時間経過で数える年齢ではない、若いということをもう少し広くとる余地はあるように感じた。年齢が若い人を引っ張っていく人がい

ることで、どう活動したらわからない人を導いていく、地域で活動をしている方々や近松かたりべ会のような歴史を受け継いでいっている方々が引っ張っていけるといい。ビジョンの中にどう反映させるかは事務局預かりとさせていただきます。

「学び・楽しみ・交流する文化・芸術体験を支える」では、元々「市民の芸術体験を支える」であったが、社会包摂やダイバーシティの観点から、もっと芸術ではない視点を入れていきたい、ということでも文言を入れていったが、まだ仕上がりがきいていないという印象はあった。文言整理の必要性をご指摘していただいたと捉え、検討していきたい。

SNS 等情報発信の話では、ビジョンということでもどこまで具体的に書けるのかということはあるが、具体的に情報発信に課題意識があって、今は SNS を使う、というある意味当たり前のことしか言えていない。「戦略的な情報発信」の「戦略的」ということも議論の余地があるのかなと思う。あと SNS と動画がクロスオーバーしているところも意識していきたい。

人材育成の話で、地域で文化を育てていくというのは簡単なことではない、とのご意見もあった。計画ができた暁には推進体制の中で本市の取組を見て応援・ご指摘いただきたい。

(コーディネーター)

私は「おうちでアルカイック」の大ファンだが、市外への情報発信含め財団で取り組んでいる情報発信について、お願いできますか。

(オブザーバー)

「おうちでアルカイック」に加え、来年度に向けて動画作成の充実を図るため市に予算要求をしている。SNS は、手法を熟知できていないところがあり、twitter も徐々に発信し、リール動画についても研究はしていきたい。「おうちでアルカイック」は時間をかけて制作している現状であり、そこに専門的な技術を持つ人が入ることでもっと充実していけるのではと考えている。今後も財団としても多彩な方法で情報発信していきたいと考えているが、まだ十分できていない現状である。

(コーディネーター)

3章、4章について主にご発言いただいたが、トータルに何かお気づきのことがあれば補足意見をお願いします。

(委員)

前回、別の委員から、ご自身が作詞・作曲・歌ったCDをいただいた。尼崎城の歌がとてもイキイキしていて繰り返し聞いた。前回、ご本人のエピソードをお話いただき皆で感動したが、このまちで自分がつらいときにこのまちで音楽に出会ったことによって人生が開けていったということだった。だからこそ、尼崎に対する愛情が深く、ああいった曲作りができるのだ、と非常に感動した。

そこから考えると、若い人の夢を応援するのに大人の文化力が必要だろう。若い人に場を作るだけでなく、若い人をうまく巻き込めるような、尼崎らしい市民性、おせっかい力を発揮できる大人が、気付いて若い人に働きかけられるような仕組みは何なのか、と改めて考えさせられた。コー

ディネーターより出された「若い人と若い心を持つ方との協働」というのは非常に良いテーマだと感じた。

(委員)

私も高齢者だが、育てる側のベースがちゃんとできていないと若い人に有益な環境作りができていかない。年配者の役割という自覚が必要なのだろう。若い人たちがチャレンジしていけることをしっかりと良い方向にリードできる大人が必要。若い気持ちを持っている大人こそ、若い人たちを応援できる人材となっていくのだろう。大人の学びを文化でしっかりやらないといけない、というのが根本。そこをしっかりと押さえて意識していないと本市の文化行政は崩れてしまうのではと市民の一人として心配している。生涯学習社会の構築により地域の教育力が上がる、文化的な市民がいることで文化的な活動が起こる、文化的な事業・イベントが行われている、となるとそういうところに他の地域や外国からその光を見に来るだろう、と 100 年の構想で見ている。前回、観光をどう組み入れるか、という話もあったがどこかに表しているか？

(コーディネーター)

前回観光がらみの話はあったが、文化政策そのものを観光資源として活用すべきではないかという文化庁の方針が出ており、文化芸術のテーマと観光を連鎖していく必要がある。市役所内部でも議論中のようなのでご意見を踏まえ文言上の工夫ができるのではないかと。

(委員)

若い人って何歳から何歳までなんだろうと感じた。

私も誰かがしているイベントに参加してみないと想像できない。いざ人が集まるイベントを考えた時に、講師の方、人員配置等、経験していることはできるがしていないことはできない。いいところ取りではないが、誰かがやっている事のいいところをたくさん取り入れていいイベントをする等、尼崎の文化を次の世代に伝えていけたらいいなと思っている。

私は東京から尼崎に帰ってきたときなど、とてもホッとする。尼崎がとても好き。子どもたちも尼崎が好きで、私が尼崎のイベントに連れて行くのでイベントが大好きで、それで尼崎で活躍している人たちを見てカッコイイな、自分も参加したいなと感じて欲しいと思っている。最近あったイベントでは、運河のカラオケがとても面白かった。運河のあたりは近寄り難かったが、ネオンがキラキラして綺麗で印象が変わった。残念ながら参加者が少なく SNS や紙の告知では限界があると思うので工夫していけたらいいと思う。

単純に言うと、すごい人たちをたくさん集める、すごい人たちの話を聞く、それを知ることで自分たちも面白いイベントつくろう、という風になればいいなと思う。

(委員)

年齢のことだが、私は食育サポーターをしているが、中心は 70 から 80 代の方である。離乳食の進め方の講座や YouTube での発信など、分からないといいながら皆で力を合わせながら動画の撮影もしたりしている。年齢だけでは区切れないと前から思っていた。

日本語ボランティアの実習で、フィリピン人の 30 代の女性に「どこの国から来たか」と尋ねたら緊張もあってなかなか返事が返ってこなかった。やっと出たのが「フィリピンに来ました」という言葉で、「フィリピン“から”」がなかなか出ない。どの位前に来たかと聞くと「12 年」、お友達はと聞くと「1 人」ということだった。お子さんが 2 人おり、家では日本語で話しているということだが、もっと交流があればもっとお話しもできるのではないか。日本に来て1、2年かと思ったが 12 年ということに驚き、ひとりも取り残さないことが大事だと思った。

(コーディネーター)

貴重な体験談をありがとうございます。そういう意味でも多様性は大事である。

(委員)

「学び・楽しみ・交流する文化・芸術体験を支える」はいいことがいっぱい書いてある。「良質な芸術を市民に提供する体制づくり」はまさにこの通りで具体的にどうしていくかである。絵に描いた餅にならないよう実が伴っていくように、行政にとっても難しい事かと思うが、取り組んで欲しい。3 年も 5 年も先になると効果も薄れるので、具体性を持って一つ一つ策を講じて欲しい。

また、今一番危惧しているのは部活の在り方である。国の方針で部活の地域移行が進められる。日本の音楽文化は非常に立派で、子どもたちがこんなに楽譜を読めて、楽器が弾ける国はない。日本の若手の奏者は非常に素晴らしい。これからそれが失われていくのではないかと心配している。実態が整わないまま地域移行が始まることを危惧している。

(コーディネーター)

これは全国的に問題となっている。できれば尼崎でも小・中学生を指導する市吹奏楽団やセミプロ級の指導者がたくさんいればよいが、とても全ての小・中学校の面倒を見られるほどはないと思う。これは尼崎では教育委員会が検討をしているのか。

(事務局)

教職員の働き方改革の中で、音楽のみならず芸術・スポーツも含めて地域に移管して地域で指導者をという流れがある。他方で学校の部活動がスポーツや吹奏楽等競技の土台となっておりそれがどうなるのか、国でも議論が行われているところで、少しずつ各地でモデルが行われており議論の行方を見ている。ただし、これには必ず予算が必要で国がそれを担保できるのか、また、お金があっても人が居るのか、という検討プロセスの途中にあるという認識である。

(コーディネーター)

情報発信等様々な課題があるがコメントをお願いしたい。

(委員)

尼崎で人口減少の中でも外国籍の方は増えているなどの話を聞いた時、国際文化交流的なことに触れられていなかったなと感じた。いろいろな国の方が来られているということは、尼崎のこ

とを知っていただくということもいいが、私たちもフィリピンの方からフィリピンの文化を聞く機会が必要かもしれない。お互いに理解をし合うためには相手のことも分からないといけないので、相手のことを教えていただく機会があるといい、と思う。尼崎は中国とドイツに友好都市があり、アウクスブルク市へは姉妹都市提携 60 周年のときに高校生の吹奏楽団の派遣があったが、今そういう活動が容易にできる状況でもなく、物理的に移動はできないけれど、住んでいる方との文化的な交流に関して、文言として入っているといいと思う。例えばオーストラリアでは、博物館でアンバサダーと銘打ちいろんな国から来た移民の人たちが自分たちと同じマイノリティの方に来てもらって、自分たちの言葉で話したり、逆に自分たちの文化をオーストラリアの人たちに知ってもらう、ということをやっている。そういうやり方であれば大きな予算を使うことなく相互に理解し文化を享受し合うこともできると思う。

尼崎には「南部再生」という冊子があり、地域に根差した文化を良い切り口でトピックを作って紹介されている。バックナンバーを見ていると尼崎の生活文化、市民の間に根差しているいろいろな事が書かれていて、こういう目線もとても大事で、大文字のものだけ取り上げるのではない、という視点を文言として入れられるといい、と思う。

(コーディネーター)

「南部再生」はとても面白い冊子で尼崎の暮らしがよく分かる。生活目線、地域目線の感覚もどこかに取り入れていただければ。国際交流の話は少し触れられるのではないかな。交流と学びをどこかで感じられる文言を検討して欲しい。

(アドバイザー)

ティーンズサポートチケットは 10 年前位に、シティプロモーションの部署で、最初にやったものだった。「若い人のチャレンジを応援する」とは、要は経験機会を提供するという事で、飛行機は人が居なくても飛ばさないといけないので空席ならディスカウントしてでも機会を提供するという事もあるだろうという話から始まり、総合文化センターの事業だけでなく、ピッコロシアターのご協力もあり今の姿になっている。こういう機会を提供するという事自体がまちの物語であり、尼崎というまちのアイデンティティの領域になる。それが継続され大事であると皆さんで共有されていることは、大事なことでありがたいと思う。

「若い人」の議論については、チャレンジの意味を二つに分けられるのではないかな。若い人にとってみたら経験がないから機会を提供されないことが多いので、機会を提供していこう、ということ。ある程度経験をしている若くない人は、変化をする、ということにサポートをする機会を提供するという事で、この両方が混在しているのでそれぞれが持っている感覚により受け取り方が違ってくが、チャレンジの意味が少し違うので、そこを整理すれば混乱をしないのではないかな。

コロナ禍に関して、文化の地産地消の話があったが、今回のことで学べて経験したことは何だったのか、書き込んでいくことはあるんだろうと思う。

デジタルに関して、情報発信については変化がすごく速いので、常にキャッチアップしながら最適化していく、よい状態を作り続けていくんだという理念、計画ではなく 10 年分のビジョンなので常に変化するものについていく、どう対処していくべきなのかという話を計画的に書き込めたらと

思った。デジタルに対してこれからどう向き合っていくかというのは重要で、ブロックチェーンの技術やNFTも今後文化を育むという観点においては重要なことになるだろう。今こうします、とは書けないが、そういうことに向き合っていく、研究しながら作っていく、という話は重要になってくると思う。

別の委員より、土を耕さないといものは育たないという話があったが、この話は文化に相性がいい。土を耕す、というのは大人の文化力を高める話や、若い人のチャレンジを応援するための土壌のことだと思われ、第6次総合計画とも合致するが、協働や社会教育との接点を持ちながら土を育てていくことが地域の文化力を高める背景になるのだ、というのは書き込んでいく。そうなる、文化というのはそういうのに横串を刺している領域でもあるのでその辺をうまく内部調整しながら軽く触れることが可能になるような書きぶりができたらいいと思う。

部活動の指導者の問題は今後文化を育む上で重要である。土を育てるという観点において、学校教育の話だけでなく文化を伝えたり機会を提供したり、ということにおける指導者の役割が今後検討の必要があるだろう。ビジョンとして書き込むというより今後の検討材料として10年間の変化の中で、恐らく考えていかなければならない領域で、しっかり今の時点で分かることを書いておくことも必要かもしれない。

また、グローバル・シチズンシップを育てていく、ということが、誰ひとり取り残さないことになってくだろう。そういうことも多様性にあふれたまちの一つのアイデンティティになるだろう。

非常に良きテーマと良き内容、市全体の政策全体のことも語られていて、狭義における文化のみではなくそれを支える広義の地域の文化やアイデンティティも議論がされていて、久しぶりに尼崎のこころを感じられた。ありがとうございました。

(コーディネーター)

文化のことは culture といい、これは元々耕す、という意味である。尼崎を耕すと文化の実りが見えてくる、というのが素敵なまちの条件かなと思う。ご指摘のように、デジタル社会がどうなるかは文言に取り込むのは難しいが、将来の社会変化に合わせて新しい文化や技術も取り入れる。最近他の会議で話題になったのだが、最近政府は Society 5.0 というが、具体的にそれを市民生活に落とすとどういうことになるのかというと技術系の人の意見と文化系の人の意見が全然違う。その辺をうまくビジョンの中に取り込めると素敵だなと思う。

(オブザーバー)

実はこのビジョンは、今回の改定で3本目になる。初めは平成7年に作られ、その時に担当していたのが、オブザーバーの私たちである。その次、平成28年にそれまで放置していた文化ビジョンにもう一度命を吹き込もうと関わったのが、アドバイザー、事務局担当職員、私であった。市が目指すものというのはそんなにガラッと変わるものではなく、ある意味同じことを地道にずっとやってきたものかなと思う。ただその時々々の社会背景があり、最初は尼崎のイメージチェンジだった。皆から文化がないまちだと言われ、そんなことない頑張ろう、というのが最初であった。その次は、定住促進を掲げている時期で子育て世帯を呼び込もうとしたのが前回ビジョン、今回はその二つとも包含し、もっと広くまちづくりにつながるような地域・コミュニティの観点から文化ビジョンを策

定することになる。ただ楽しむだけの文化でなく、それが直接でなくてもまちづくりに還元されていくという視点で書かれていると思う。そういう意味で、生涯学習というのは学ぶ側からの視点で、学ぶことで地域がよくなっていくという社会教育に結びつくこと、それがまちづくりであり、文化が不可欠なのかなと思う。

若い人のチャレンジに関しては、実は前回策定時も色々と意見を言い合っていた。チャレンジを応援するにも、役所の予算には限りがあり、まずは経験や資力に乏しい若者を優先して予算を使うということだった。ただし、「若い」はダイバーシティの観点からもあまりいい言葉ではないのではないか、とも思う。

(コーディネーター)

いろんな角度からご意見をいただいたが、委員の方から他に意見があれば。

(委員)

私は以前、多可町のふるさと納税でツーリズムアンバサダーに就任できる券、というのをした。それは毎日1回多可町のことを思い出してくれる人なら誰でも、ということで、1万円ふるさと納税するとタスキと特産和紙の認定書がもらえ、一年間はいろんなところで多可町をアピールする、というもの。これの尼崎版があればいいなと思う。ふるさと納税してもらい、アンバサダーを募り、尼崎の文化を発表してもらおう人、みたいなもの。前々から尼崎があればやりたいと思っていた。尼崎は中核都市なのにな。SNSでフォロワーが2000人以上3000人以上ならなれますよ、とかだと私がやりたいと思った。

NFTの話が出たが、息子がOpenSeaで絵を出している。息子の「僕はゴジラを作りたい」という夢をかなえてやりたいと思い、1年かけてデジタルアートに価値が付くことを教えた。小学5年生の夏休みの宿題で、NFTは何かというのをしたが学校の先生はNFTって何かわかっていなかった。子どもにはこういった手法で評価されることも体験して欲しいと思っている。

(コーディネーター)

尼崎のアンバサダーはふるさと納税でやっていただけるかどうか。デジタルアートは成功するといいですね。

今日いただいたご意見は、素案にどう反映できるか事務局に検討いただく。次回の委員会ではゴールに近いところまで文章を煮詰めておくことになる。

(委員)

誰かが教えて誰かが学ぶということではなく、地域の文化では学び合いという形式で進められるようなプラットフォームができていけば、尼崎市民がみんなとても文化的になるのかと感じた。

(コーディネーター)

では本日の会議は以上で、次回に向けて事務局の奮闘を期待する。事務局にお返す。

(事務局)

闊達な意見をありがとうございました。意見に対してお返しできることをお答えしておく。

- ・若者の定義をあえて言うなら、法律で定義があり 15～39 歳である。
- ・国際交流と観光については、しっかりと書けていなかったり、説明不足で伝わってなかったかもしれないが、観光については P8 観光資源の活用部分で、国際交流については P10 社会包摂部分で触れている。これで書きぶりが弱いということであれば今後の議論の中で検討をしたい。
- ・この計画を書いた後どうしていくか、PDCA サイクルという言葉もあるが、計画をどうチェックしていくか、そのことは P12 に評価の仕組みということで記載し、現状の事業の評価をより発展させて計画の進行管理をしていく仕組み作りが必要と思っている。

(オブザーバー)

文化振興財団でも中長期経営計画があり、今回の尼崎市文化ビジョンに合わせて改めて作成していこうと考えている。今の中長期経営計画の本論はストックプラン(こうのとりのプラン)、こうのとりが子供を産んで戻ってくるというのが、耕して芽が出て花が咲いて実になる、という部分である。海外へ出ていろんな尼崎出身者が活躍する、そういう人たちが故郷に帰ってきてまた芸術家を育てる、ということを理想として策定している。中長期経営計画はビジョンの実施計画的な位置づけとなるので、骨太の部分については文化ビジョンの考え方を入れ込みたいと思っている。

(コーディネーター)

ぜひよろしくをお願いします。